教育メディア研究 Vol. 11, No. 2, 39−46

学習者のWeb情報に対する「批判的な見方」尺度の作成

後 藤 康 志（新潟大学大学院）

メディアリテラシー育成の重要性は高まりつつあるが，その実践に先立つ学習者のメディアリテラシーの状況を把握する尺度は整備されているとは言えない。そこでメディアリテラシーの実践に向けての基礎的知見の提供を目指して，近年普及の著しいWeb情報に焦点化した「批判的な見方（以下CVS）」尺度を作成した。作成した尺度はCVSを傾向性と技能に分け，それぞれ評定尺度法と自由記述法で測定するもので，大学生並びに現職教師163名を対象とした調査の結果，①CVS傾向性尺度は，項目-全体得点相関，GP分析，信頼性係数から高い信頼性を持つこと，②CVS技能尺度について，Web情報の信頼性を確認するために必要な情報を具体的かつ広範に記述できる被験者は，CVS傾向性も高く，CVSの傾向性と技能は高い連関を有することが示唆された。

キーワード：メディアリテラシー，Critical Viewing Skills，傾向性，技能

1．はじめに

Buckingham (2003) は，メディアリテラシーを「メディアを利用し，解釈するために必要とされる知識，技能，コンピテンシー」として捉え，テクストの分析，評価，批判的リフレクションを含む「批判的リテラシー」としての面を強調する。メディアからの情報が氾濫する現代，情報を鵜呑みにせず，真偽を判断する能力の必要性は高まっている。

我が国におけるメディアリテラシーの歴史をみると，メディアは学習や教育を改善するために活用され，CVSの考えは十分に生かされてこなかったという（水越，2002）。「新聞記者やテレビ制作者が，いかなる意図のもとで情報を再構成しているのか」というCVSに関する実践（例えば堀田，2004）が見られるようになってきたのは最近のことである。

こうした実践は意義のあることであるが，多くのメディアリテラシー教育実践が学習者を「白紙」として捉えている傾向があることが指摘できる（後藤，2004；Buckingham 1998）。学習者は日々メディアと接触し，豊富な経験と知識をもっており，そこから実践をスタートするべきである。言い換えれば，メディアリテラシー教育実践の基盤として，学習者のCVSの把握は欠かせない。

しかし，学習者のCVSの特徴については明らかになっていない点が多い。確かに，メディアリテラシーやメディア操作スキルに関する調査や尺度構成は我が国でもこれまでもいくつか行われてきている（鈴木ら，1992；電通総研，2003；無藤・白石，1999；宮田，2001；小池，2004；高比良ら，2001；後藤・生田，2004a）。しかしCVSの把握となると，これらが十分に実態を反映しているか疑問が残る。2001年の「デジタル情報化社会における青少年とメディア」調査によれば，テレビ番組の中で最も信用できるのはニュースで，その信用度は6割程度であったという。筆者らの研究（Gotoh & Ikuta, 2004；後藤・生田，2004b）においても「テレビを見ていておおげさな表現をしていると思うことがある」という項目でほとんどの人が「そう思う」と答えている。

この結果から多くの学習者がCVSを有して

いるといえるのだろうか。この種の尺度はほとんど自己評価であり，表面的なレベルで留まる可能性がある。そうではなくて，受け手が「どれだけメディアを分析・評価しようとし，また実際にできるのか」を測定することで，学習者の状態を把握することが必要であり，メディア教育はそのような基礎的知見に基づいて，デザインする必要があるのではないだろうか。

2．目　的

本研究は，メディア教育の前提となる学習者のメディアリテラシーの把握ため，Web情報に限定したCVS尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

Web情報のCVSに関する実践は Harris (1997)，Web Awareness Network，我が国における情報教育などがあるが，背景でも述べたとおり，その基礎となる学習者の状態の把握についての知見は十分蓄積されているとは言えない。

Web情報に関するメディアリテラシーには，従来の枠組みでは対応できない点が多く，Buckingham (2003) はWWWを巡る新たな研究課題として「受け手側がWeb情報の信頼性を確認する方法」を挙げている。筆者自身の公立学校教員としての経験からも，子どもが「サーチエンジンでたまたまヒットした」Web情報を，出展を吟味することなく教科書や資料集と同列に扱う姿を幾度となく目にしてきた。CVS尺度は，このようなメディアリテラシー教育の今日的な課題に寄与できる。

しかし，メディアリテラシーの測定については連合王国においてもGCSE程度しかない (Kirwan et al, 2003)。我が国のCVSに関する尺度もメディアのイメージを漠然と問う表面的なレベルに留まっており，CVSの測定にまでは踏み込んでいるとは言えない。

本研究ではWeb情報に対するCVSを「Web情報の信頼性を分析する視点をどの程度平素から意識し，その分析の視点を生かして情報の信頼性を判断する能力を有しているのか」に限定し，その能力を測定することにする。この際，参考になるのがWatson-Graserテストなど多くのテストが開発されており，我が国においても研究（例えば久原ら，1983；道田，2001；平山，2004）がなされている一般的な批判的思考の測定研究である。批判的思考測定においても選択肢法，自由記述法などさまざまな測定の工夫がなされている。これらの知見を参考にし，メディアリテラシーにおけるCVS測定という問題に量的・質的両面のアプローチから迫っていくことが必要である。

3．方　法

3．1　対象及び実施時期

CVS傾向性の予備調査は大学生及び現職教師163名を対象とした。CVS技能についてはこのうち作文力がほぼ調査結果に影響を及ぼさない程度に同等とみなせる現職教師37名のみを対象とした。調査時期は2004年 7 月から 8 月である。

3．2　項目の作成

Ennis (1987) は批判的思考の構成要素を態度や情意的な傾向性 (disposition) と，認知的側面である能力 (ability) とに分けて整理している。メディアリテラシーも同様に捉えられることが多い（例えばChrist, 1997)。

そこで，本研究でもメディアに対するCVSを表 1 のように捉え，測定尺度を作成する。

(1) CVS傾向性の測定

従来の尺度は，「Web情報には不正確なものもあると思うか」というように直接的な自己評価を求めるものが多いが，それでは表面的な回答に留まる可能性がある。そうではなくて，ここでは「CVSを有するならば注意を払うであろうと思われるWebの信頼性の分析

表１　CVS尺度の枠組み

		CVSの具体的内容	尺度
CVS	CVS傾向性	Web 情報に対して、下記の観点に注意して参照する習慣があるか ● 作成主体とその属性 ● 作成時期・更新頻度 ● ドメイン ● 連絡先の明記 ● 作成目的	評定尺度法
	CVS技能	具体的な Web 情報の信頼性を、下記の観点から判断し、記述することができるか ● 情報源の確実性 ● 情報の正確性・理性度 ● サポート情報の有無	自由記述法

視点」を普段からどの程度意識しているかによってCVS傾向性を測定する。項目は，Harris (1997) のWeb上の情報源の評価観点（①情報源の確実性，②情報の正確性・理性度，③サポート情報の有無）を参考にし，

①「ホームページを作った人は誰か（作成主体)」
②「いつ頃作られたホームページか（作成時期及び更新頻度)」
③「ホームページのドメイン（co, ac, go など）はどこか（ドメイン)」
④「ホームページに作った人の住所や連絡先が書いてあるか（連絡先の明記)」
⑤「何のために作られたホームページなのか（作成目的)」
⑥「企業や官庁など団体が作ったものか，個人が作ったものか（作成主体の属性)」

について，「とても気になる」から「全く気にならない」の 4 件法で選択してもらい，「とても気になる」が 4 点，「全く気にならない」が 1 点になるように得点化し，6 項目の合計点を尺度値とした。

(2) CVS技能の測定

CVS技能は，具体的な状況を設定しその下で「どのような情報を，どのような手段で収集することで，信頼性を確認すればよいか」を答えてもらうことが必要である。一般的な批判的思考測定では，自由記述法による測定が用いられており，ここでは具体的なWeb情報（表２）の正確さを確認するために必要な情報と，その情報源は何かについて自由記述法で回答してもらい測定する。

表２　技能測定のための問題文

あるホームページでダイエット食品が紹介されていた。ホームページでは、ある医学者の紹介文として「この食品は非常に手の込んだ方法で作られているため高価だが、効果もある」と書いてあった。さらに実際にこの食品でダイエットに成功した３人の体験談ものせられていた。

３．３　信頼性及び妥当性の検討

CVS傾向性については尺度値全体と項目の項目-全体得点相関，GP分析，信頼性係数の検討を行う。統計解析ソフトはSPSSリリース11.5.1Jを使用する。

CVS技能については，傾向性の上位25%を上位群，下位25%を下位群，その中間を中間群とし，記述内容を分析することによって，傾向性との関連を検討する。

４．結果と考察

４．１　CVS傾向性

まず尺度得点の分布を見ると，ほぼ正規分布と見なせる分布をなしていた。項目-全体得点相関であるが，「ドメイン」の項目と尺度全体の相関係数が .549，「作成者」が .68，

残り 4 項目は全 .70以上の高い相関を示していた。

信頼性係数は .78であった。

GP分析においては得点分布から得点上位25%（39名）と得点下位25%（37名）を抽出し，平均を比較した（表 3 ）。結果として全ての項目において 1 %水準で有意な差がみられた。

以上から，尺度の信頼性は高いことが示唆された。

表 3　GP分析

観点	グループ	平均	標準偏差	
作成者	上位群	3.13	0.70	**
	下位群	1.78	0.67	
作成時期	上位群	3.31	0.69	**
	下位群	1.62	0.64	
ドメイン	上位群	2.33	0.77	**
	下位群	1.14	0.35	
連絡先	上位群	2.77	0.78	**
	下位群	1.11	0.31	
作成目的	上位群	3.46	0.55	**
	下位群	1.81	0.70	
作成主体（団体・個人）	上位群	3.56	0.55	**
	下位群	1.57	0.77	

＊＊は 1 %水準で有意

4．2　CVS技能

自由記述に要した時間は20分程度で，書けなくなった時点で終了してもらった。被験者の作文力であるが，他の課題におけるレポートの内容から見て調査結果を左右するほど極端な作文力の差異はないと思われたので，全て採用することにした。全体的傾向を把握するために記述内容を抽出・項目化した（のべ195項目，一人あたり平均5.27項目を記述）。CVS傾向性上位群（ 8 名）・中間群（21名）・下位群（ 7 名）の記述量及び内容を比較したところ，次の特徴が認められた。

(1) 記述量の比較

得点上位群の自由記述は量が多く（一人平均6.38項目記述），中位群（同5.04項目），下位群（同4.71項目）よりも多くの点からWeb情報の信頼性を確認する方法を記述することができていた。

(2) 情報源の確実性

情報源の確実性について，「ある医学者」であるが，上位群では医学者の所属，専攻分野，業績，学会での評価などの証明となる情報の必要性を 8 名中 7 名（87.5%）指摘することができた。これに対して，中位群は22名中15名（68.18%），下位群では 7 名中 2 名（28.57%）指摘できたに過ぎない。記述内容を比較してみると，下位群の項目のみを示すものが多いのに対して，上位群の記述は「判断を下すためにどんな情報が欠けているか」，「代わりにいかなる情報が必要で，どう収集したらよいか」まで言及している。具体的な記述内容を表 4 に示す。

表 4　情報源の確実性に関する記述例

下位群の記述例	医学者についての情報
上位群の記述例	確認事項－ある医学者。 確認内容－栄養（に関する・筆者加筆）学会での信頼と実績はあるか。 手段－学会機関誌・業界の人。

(3) 情報の正確性・理性度

製品の誇張するための表現のレトリックをどれだけ見抜くことができるか，という観点で見ると，各群で共通して見られたのは，「ダイエットを行った全員に対する成功した人の割合を示す必要がある」というものである。上位群の特徴としては，「他のダイエット法（絶食など）と併用していないか」「なぜその 3 人が選ばれたのかについて，情報がないか」など，批判的思考における「他のもっともらしい原因を排除できるかで因果関係を決定する（例えば Zechmeister & Johnson, 1992)」を用いた判断が見いだされた。こういった視点からの記述は，中位群や下位群には見られない。

(4) サポート情報の有無

Web情報の信頼性を判定するために，他のWeb，新聞，雑誌，図書等から関連する情報を集めることが考えられる。この点について，「どのメディアを使って」まで言及した記述は上位群 8 名中 6 名（75%），中位群22名中15名（68.18%），下位群 7 名中 5 名（71,4%）で，いずれも 7 割前後である。しかし記述内容には特徴があり，上位群では「消費者センターなどの機関に苦情が寄せられていないか」など具体的であるのに対して，中位・下位群では「効果をホームページで調べる」といった一般的な記述に留まっている。

さらに特徴的なのは，中位群・下位群では情報の入手先に「Webを作成した企業そのもの」を挙げていることである。虚偽の情報を流している可能性のある発信元からの情報は，サポート情報とならないが，中位群・下位群はこの点に気づいていない。これに対して，上位群ではこのような記述は見られなかった。

5．まとめと今後の課題

CVS傾向性尺度の信頼性について，作成した尺度は項目－尺度相関，GP分析，信頼性係数から高い信頼性を持つことが示唆された。

また，CVS傾向性とCVS技能の関連を検討した結果，CVS傾向性が高いほどWeb情報の信頼性を確認するために必要な情報を具体的かつ広範に記述できており，CVS技能も高いことが示唆された。これは生活経験上の知識とも整合するものであり，作成した尺度の妥当性を示唆するものと言えるだろう。

今後の課題として，2 つあげる。第一はテキストマイニングの手法の導入である。自由記述法は処理が煩瑣であるだけでなく，分析にあたって分析者の主観が入り込む可能性がある。また，CVS測定は未だ探索的なレベルにあり，異なる複数の観点，例えばメディア操作スキルやメディアに対する態度など別の角度からテキストデータを解析する必要性もある。テキストマイニングの手法を導入することが，一つの自由記述法の解析の突破口となるかも知れない。

第二は，自由記述法によらないCVS技能の測定である。自由記述法では作文力が測定を左右する危険性がつきまとう。今回は問題文という形で提示しているため，もっと年齢の低い学習者，例えば小学生を対象とした場合には読解力が強く作用するおそれがある。そこで，実際のWebページのプリントアウトで問題を示し，ワークシート的に自由に書き込ませるなどの形式が考えられる。このような新しい方法と，今回の自由記述法を比較・検討する必要がある。

本尺度を更に発展させ，メディアに対する転換点と言われる小学校高学年レベルから中学生レベルを視野に入れた調査研究を行うことにより，CVSの学年発達の特徴を明らかにし，メディア教育のデザインに資する基礎的データを提供していきたい。

6．引用参考文献

Buckingham, D. (2003) *Media Education Literacy, Learning and Contemporary Culture.* Polity.

Buckingham, D. (1998) Media education in the UK: moving beyond protectionism. *Journal of Communication.* 48(1), 33-43

電通総研（2003）『メディア・コミュニケーション研究　第５回生活者情報利用調査レポート　i-Life2003　～情報化社会に生きる　メディア支出・接触時間にみる情報メディア環境の現状と動向分析』

道田泰司（2001）「日常的題材に対する大学生の批判的思考－態度と能力の学年差と専攻差－」『教育心理学研究』49, 41-49.

Ennis (1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities. Teaching thinking skills: theory and practice. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg. Freeman.

後藤康志，生田孝至（2004a）「メディア操作スキルの作成に関する研究」『日本教育工学雑誌』28, 149-152.

後藤康志，生田孝至（2004b）「デジタル時代のメディア・リテラシーをいかに測定するか」『第11回日本教育工学会教育メディア学会年次大会発表論文集』21-24

Gotoh, Y. & Ikuta, T. (2004) A Study of Children's Media Literacy in Japan, Paper presented at British Educational Research Association 2004, University of Manchester Institute of Science and Technology.

後藤康志（2004）「日本におけるメディア・リテラシー研究の系譜と課題」『現代社会文化研究』29, 1 -18.

Harris, R. (1997) Evaluating Internet Research Sources. http://www.virtualsalt.com/evalu8it.htm

久原恵子；井上尚美；波多野誼余夫（1983）「批判的思考力とその測定」『読書科学』27(4), 131-142.

平山るみ（2004）「批判的思考を支える態度及び能力測定に関する展望」『京都大学大学院教育学研究科紀』50, 290-302.

堀田龍也（2004）『メディアとのつきあい方学習「情報」と共に生きる子どもたちのために』ジャストシステム

Kirwan, T., Learmonth, J., Sayer, M. and Williams, R., (2003) *Mapping media literacy Media Education 11-16 years in the united kingdom.* Report commissioned by the BFI/BSC/ITC

小池源吾（2004）「メディア・リテラシー学習による意識変容」国立教育政策研究所（編）『生涯学習を生きる力　メディア・リテラシーへの招待』東洋館出版

宮田加久子（2001）「情報ネットワーク社会に求められるメディア・リテラシー」『明治学院論叢』第658号　社会学・社会福祉学研究第109号，1 -35.

水越伸（2002）『デジタル・メディア社会』岩波書店

無藤隆・白石信子（1999）「子供のメディア利用と生活行動の変容～小・中・高校生調査による最近の動向と考察～」『NHK放送文化調査研究年報』44, 255-315.

Ruminski, H., Hanks, W.(1997) Critical Thinking, Christ, W. G.(ed.) *Media Education Assessment Handbook.* Lawrence Erlbaum Associates, 143-164.

鈴木裕久・藤井義久（1992）「情報機器利用の関連要因」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』No. 2, 1 -43.

高比良美詠子・坂元章・森津太子・坂元桂・足立にれか・鈴木佳苗・勝谷紀子・小林久美子・木村文香・波多野和彦・坂元昂（2001）「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『日本教育

工学会論文誌／日本教育工学雑誌』24, 247-256.

Zechmeister, E.B. & Johnson, J.E. (1992) *Critical Thinking: A Functional Approach.* (宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡訳『クリティカルシンキング入門篇』北大路書房 1996)

Construction of Critical Viewing Skills Scale on Web browsing
— As a Basic Knowledge of Media Education —

GOTOH, Yasushi (Graduate School, Niigata University)

With the spread of Information Technology, the importance of media education is increasing. Above all, Critical Viewing Skills, referred to as CVS, is an important factor. Especially, there are few studies concerning CVS with regards to the Internet and web browsing. The author focused on the ability of CVS web while browsing, and constructed a scale of CVS as basic knowledge of media education. The author divided CVS into two parts, 'disposition' and 'ability'. To assess CVS, the author used a qualitative approach as well as a quantitative approach. As a result of this, the following 2 points were found: 1) As a result of the reliability coefficient, GP analysis and Item total correlation, the reliability of the CVS scale on disposition seems to be high. 2) As a result of the qualitative analysis of the CVS scale on ability, there is a clear relationship between disposition and ability. The subjects in the high disposition group can point out how to identify the reliability of information on the web. To summarize, the reliability and validity of the CVS scale we constructed seems to be confirmed.

Key words : Media Literasy, Critical Viewing Skills, Disposition, Ability